

タスタスマニアの高校から 4

もうすぐ帰国

本田 貴文

独特のカテゴリーがある

オーストラリアには日本にはない人々のカテゴリーがある。日本でいう「ヲタク」のようなものだが、そういうものがこっちには無数にある。ほとんどが友だちから聞いた話ではあるが、知っている中からいくつか紹介していこうと思う。

ボーゲン

安い服を着ている。普通の人を除いたなかで一番比率が多い。彼らはマリファナをやり（こっちでは日本より簡単にマリファナやドラッグが手に入り、知り合いの中でもマリファナをやっている人たちはいる）、学校にはあまり行かない。彼らの多くは仕事を持たず、一

定の居住区に固まって住み、ボーゲンどうしが結婚しボーゲンの子どもを産む。とはいっても僕には彼らを見分けられないので、町を歩いて見かけたら友だちが「彼らはボーゲンだよ」と教えてくれるぐらいである。もちろんボーゲンの中にもいいやつはいるのであるが。

イーモ

イーモ (emo) というのは emotion (感情) という単語から来ており、「憂鬱 (depression)」にさいなまれている。彼らは黒色を好み、黒いジーンズと黒いTシャツを着て、髪を黒に染める。常に憂鬱にさいなまれているため、学校にはほとんど行かず、リストカットをする。彼らの好む特定の音楽があり、RockやPunkのようにEmoという憂鬱を表現した音楽のジャンル



がある。彼らは憂鬱すぎてしゃべらないらしいので、話したことはない。見たこともほとんどない。

ナード

これは日本語の「ヲタク」とまったく同義語で、学校のコンピュータルームに一日中座っている人たちはこれにあたり「コンピュータナード」と呼ばれる場合もある。ホストブラザーのレイスはこのナードで、休みの日なんかは一日中コンピュータゲームをしていたりする。とはいえ、彼とは基本的に仲良くしている。日本の漫画なんかに興味があるようで、ぜんぜん日本に関心がないよりはよっぽど良いと思っている。

ミュージー

「ミュージー」とは「ミュージック」から来ている。彼らはミュージックをこよなく愛しており、学校の教科四つすべて音楽を取っている人たちなどはミュージーと言えるだろう。僕も音楽が好きなので少しだけミュージー

なのだろうか。

ほかに「レトロ」や「ボッシュ」などといういろいろあるが、これらの中には差別用語とまではいかないまでも、それで呼んではいけないものもある。日本でヲタクに向かって「ヲタク」と呼ばないのと同じである。使うかどうかは別として、知っておくだけでも興味深い。

10ヶ月の課程が終わった

数日前に試験が終わり、ホリデーに入った。十ヶ月間の学校の課程がすべて終了し、後は帰国を待つばかりである（上の写真はDon Collegeの卒業式）。家に早く帰りたい気持ちと、こっちの友だちと別れたくない気持ちとで複雑な心境である。でも、久しぶりにラーメン食いたい。

グレード12の友だちは今年Don Collegeを卒業して大学に行ったり、行かなかったり。来年Donに帰ってきてグレード13をやる友だちも何人かいる。彼らの多くはグレード11か12の時に単位を取り損ねているのだが、こっちでは留年しても恥ずかしいことではなく、けっこう普通のこととして受け入れられる。もともとグレード11も12もあまり違いなく仲良くする。僕なん

かは、来年もまたDonで過いせる人たちをうらやましく思う。

こっちの大学に行くにはPre-Tertiaryである教科を一定以上とらなければならない。教科にはPre-Tertiaryである教科とそうでない教科に分かれており、Pre-Tertiaryだけが大学に行くための単位として認められる。Pre-Tertiaryのほうがそうでない教科より難易度が高く、試験はPre-Tertiaryにだけある。大学に行くにはグレード11で少なくとも二つ、グレード12で少なくとも三つPre-Tertiaryを選択しなければならない。グレード11か12の時に単位を取り損ねていると言ったのはこれらのいずれかをとり損ねているということである。逆に、グレード11のときに四つPre-Tertiaryをとったとしても結果、カウントされるのは二つだけとなる。チャレンジするのはいいが、Pre-Tertiaryの科目ばかりだと大変というわけである。僕はグレード11でPre-TertiaryはESL（第二言語としての英語）だけだったので、もし来年こっちに残ったとしたら必然的にグレード13もやらなければならないということになる。

試験は一年に二回、二期の最後（九月上旬）と三学期が終わったあと（十一月中旬）にあった。試験が

ある人だけが数日学校に行きテストを受ける。普段は勉強していないような友だちも試験前は熱心に図書館で勉強する。彼らは基本的に熱心な生徒たちなのだ。再認識させられる。僕も英語の試験だけを受けた。ESLとは言っても、こっちに何年も住んでいる人も同じテストを受けるので、かなり難易度は高い。落ちないようにベストは尽くすが。

試験が終わってからは、再び小学校や高校の日本語のクラスを訪問したりして過ごした。これはCollegeがほかの学校よりも一ヶ月ほど早く終わるためである。おにぎりを作ってあげたり、ギターを弾いたりし、子どもたちの喜ぶ顔を見るとこっちもうれしいものである。今年一年で何度か小学校や高校を訪問したが、それによって彼らが少しでも日本語や日本の文化を好きになってくれると幸いである。

帰る前にパーティを開く。僕の留学生生活を支えてくれたホストファミリーや先生、友だちなどに感謝の気持ちを伝えて帰ろうと思う。近々帰国する。

おわりに

二〇〇九年十二月二日早朝六時に成田空港に到着し

た。久しぶりの家は快適で、やっぱり日本食はおいしいし、家族や友だちにまた会えるのは嬉しかったが、何か満たされないものを感じる。心にポツカリと穴が空いたような気がした。タスマニアで過ごした毎日はとてもたのしかった。

幼稚園と小学校の初めてのころをアメリカで過ごした僕は、日本の学校というものにずっと馴染めなかった。軍隊のような運動会の行進や日々の生活での細かなルール、生徒や先生の中に潜在する全体主義、これらのことすべてに疑問を抱えながら生きてきた。そして高校二年の春、合唱祭の練習のやり過ぎを指摘した事が原因で、クラスで孤立し、いじめにあつた。三ヶ月間の図書館登校を経験した。そのころから留学を考え始めた。方法は何でも良かった、ただクラスから逃げ出したかった。

半年後の二〇〇九年一月、クラスの人たちには何も言わずに留学した。クラスでいじめられていたときに「協調性がない」「三鷹高校辞めろ」と投げかけられた言葉がクラスを出た後も頭にあつた。三鷹高校を逃げ出した僕は、今度の学校ではうまくやる必要があつた。でないとい自分に本当に社会性がないことになるから。

それは三鷹高校の二年七組という小さなコミュニティの中だけの話であつたということを証明する必要があつた。オーストラリアでは常に気に入られるように振る舞つた。そんな僕にみんなはやさしく接してくれ、「タカはクールだ」と言ってくれた。

一瞬のように最後の日はやつてきた。ホストマザーと七人ぐらゐのとくに仲の良かった友人たちが空港まで見送りに来てくれた。少し泣きそうになりながら、デボンポート発の飛行機に乗り込み、またすぐに帰つてこようと思つた。それはそれほどの長い別れにはならないはずだ。

帰国してからは学校に行く必要はなく、三月には卒業する。クラスに戻るつもりはもうない。タスマニアを離れる一ヶ月ほど前から、また来年も留学したいという思いが強くなつた。この一年間のような経験をもう一度したかった。いろいろと考えた結果、イギリスの大学のファウンデーションコース（留学生のための基礎課程）に進むことに決め、テストを受けた。今は九月からイギリスに留学するための準備をしている。

（ほんだ たかふみ・東京都立三鷹高校三年）